

Ⅲ. 下宅部遺跡はっけんのもりの水生生物調査

下宅部遺跡はっけんのもりを育てる会 石橋 康夫 (財団調査委員会所属)
東村山ふるさと歴史館 石川 正行 (財団環境教育委員会所属)

1. はじめに

下宅部(しもやけべ)遺跡は、東京都と埼玉県にまたがる狭山丘陵の中央支丘の東端に近い南斜面から、丘陵の中央支丘と南支丘の間を流れる「宅部川(北川)」によってつくられた大きな谷の出口付近、東京都東村山市の北西部、多摩湖町の低地に位置している(図Ⅲ-1)。

1995年、都営住宅の建て替え工事に伴い発見された下宅部遺跡は、現在までの本格的な発掘調査を通じて、縄文時代後・晩期、古墳時代、奈良時代、平安時代、中世、近世にかけての低湿地の複合遺跡であることが確認された。

下宅部遺跡の一番の特徴は、豊富な湧き水のおかげで、昔の北川の姿とともに、通常の遺跡では残りづらい木の道具や水辺の施設、当時の植物や動物の骨などが数多く出土したため、当時を知る手がかりとなる“証拠”が多い点である。ゆえに狭山丘陵を生活の舞台としていた当時の人々の暮らしぶりだけでなく、当時の自然環境なども具体的に復元することのできる遺跡である。

この全国的に見ても貴重な下宅部遺跡という財産を、未来の子供達に残すために、都営住宅建設計画を変更し、遺跡の最重要地点約3000㎡を、地下に遺跡が眠ったままの状態に「埋没保存」することとなった。その場所を「成長する遺跡広場」として整備しようと、みんなで知恵を出し合って広場を育てていこうとする市民からなる「下宅部遺跡はっけんのもりを育てる会」と、地域博物館である「東村山ふるさと歴史館」との協働で、約3年にわたり整備計画や活用を考えた結果、2004年5月に「下宅部遺跡はっけんのもり」として整備され、開園した。

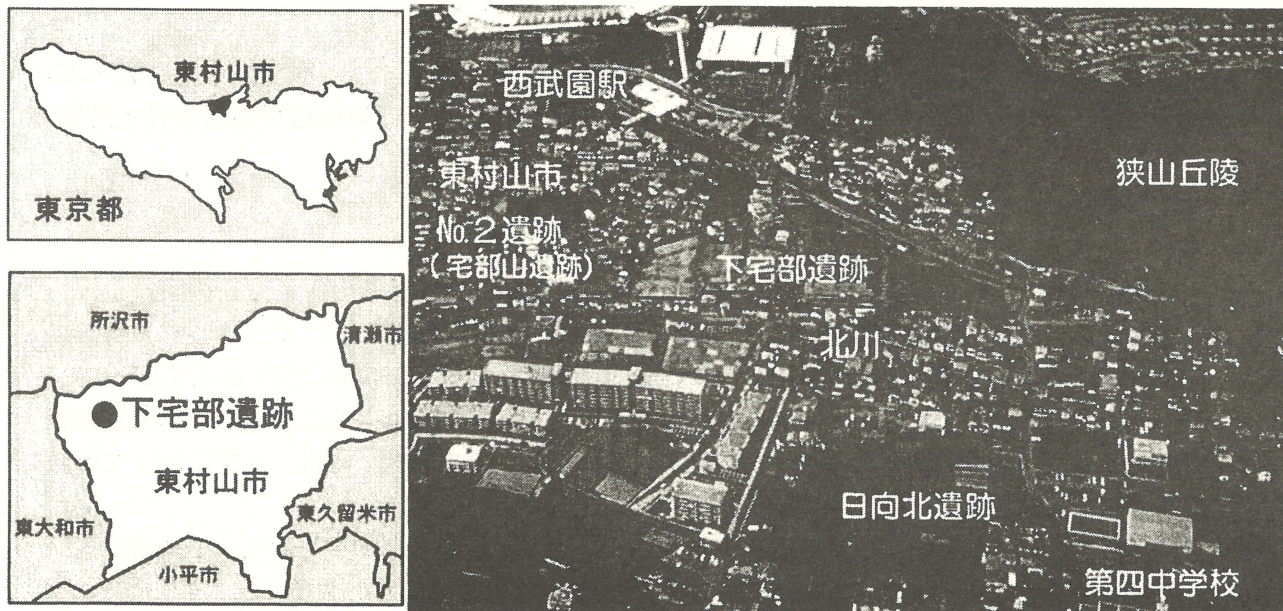
現在はっけんのもりは「育てる会」が中心となり、体験学習などの各種イベントや除草・清掃活動などの管理を行い、運営されている。その活動の一環として、はっけんのもり内に整備されている復元河道(湧水路)内の生き物調査を、トトロのふるさと財団調査委員会と共催で実施した。

2. 調査の概要

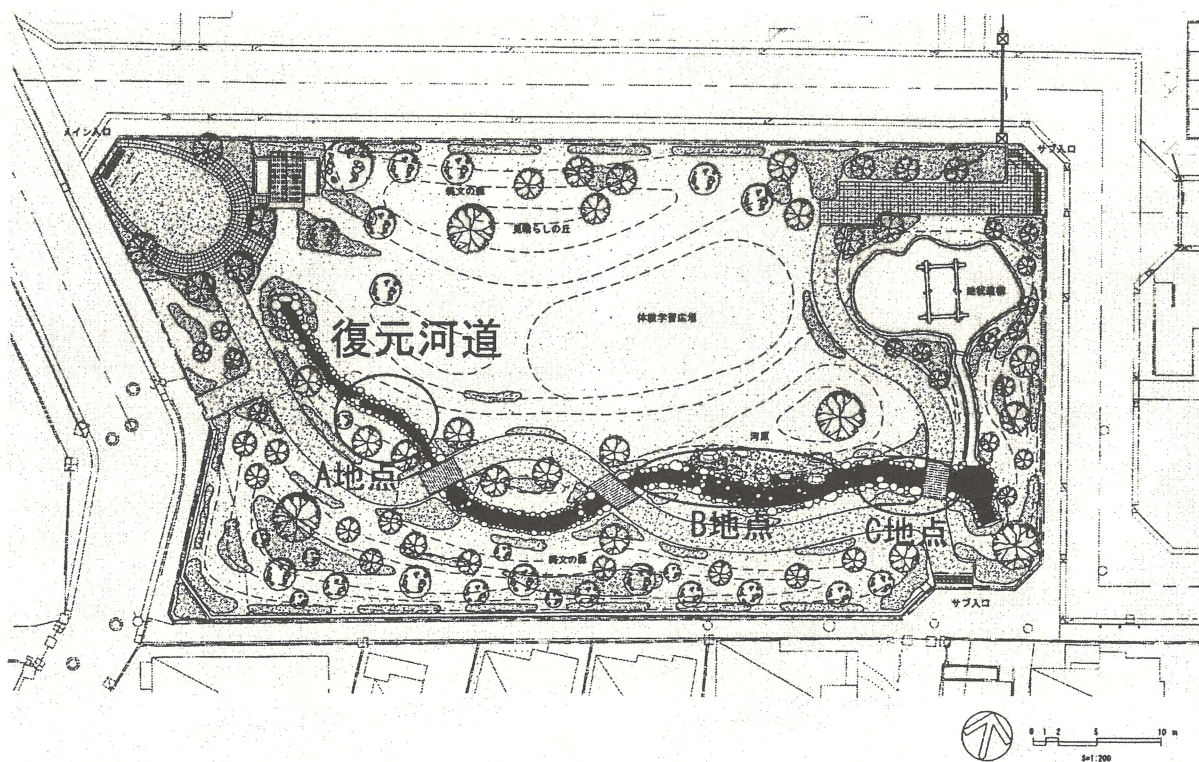
1) 調査地の概要

調査地は、東京都東村山市多摩湖町4-3に所在する「下宅部遺跡はっけんのもり」内にある「復元河道」。復元河道は、はっけんのもり北の西武西武園線沿いの都営住宅敷地内に設置された湧水集水管から導水された湧水を吐出口から流し、下宅部遺跡の特徴である川の流れを復元(流路方向は古墳時代の河道を模し、流れの標高は縄文時代の河道を模した復元)。流路内の水は循環式ではなく、下流に設置した排水部から排水している。

流路は上流から最初に通路と交差する橋までが17m、橋から体験学習河原までが22m、体験学習河原部分が11.1m、体験学習河原から排水部までが9.1mの規模である(図Ⅲ-2)。



(図Ⅲ-1) 下宅部遺跡の位置



(図Ⅲ-2) 下宅部遺跡はっけんのもり平面図とセルビンの設置場所

2) 調査日及び調査参加者

(1) 調査日

- ・調査準備：2005年8月12日（金）
- ・現地調査：2005年8月13日（土）

(2) 調査参加者（敬称略、五十音順）

石橋康夫、鹿村光俊、白鳥節子・仲井百合子・仲井宏聡（下宅部遺跡はっけんのもりを育てる会）と、石川正行（ふるさと歴史館）の計7名。

池谷文夫・佐藤千綾・長谷川勝・早川直美・宮崎豊（トトロのふるさと財団調査委員会）の計5名。

3. 調査方法

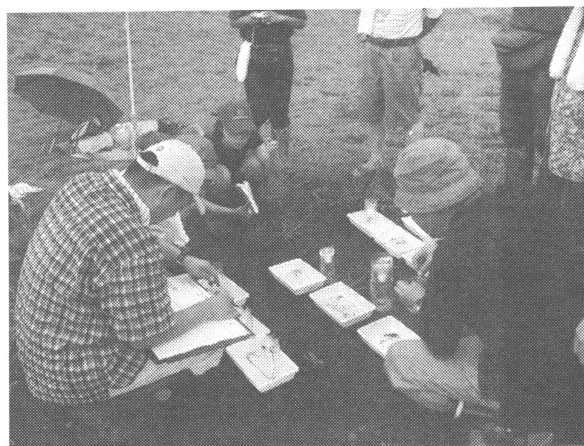
1) セルビンによる採取（写真 1、2）

調査前日（12日）の夕方、石川・石橋の2名がセルビン（市販のビンドウ風にペットボトルを切って加工したもの）に、ニボシと熱帯魚用として市販されているエサ（この調査報告では「ねり餌」と表示）の2種類それぞれと、その両方をセットしたものを仕掛けた。設置箇所は、復元河道の上流、中流、下流の3地点である（図Ⅲ-2）。

設置したセルビンを調査当日（13日）引き上げて、入っていた生物をトレイに移し替え、肉眼による生物種の同定等を行った。



（写真1）



（写真2）

2) 手網による採取 (写真3、4)

調査当日、参加者それぞれが手分けし、手網を持って、セルビンを設置した3地点を中心に復元河道に入り、生物を採取。採取した生物をトレイに移し替え、肉眼による生物種の同定等を行った。



(写真3)



(写真4)

4. 調査結果

1) セルビンによる採取結果

表Ⅲ-1のとおり。設置した全ての地点でアメリカザリガニが捕獲されていることがわかる。

調査地点 エサの種類	A地点	B地点		C地点
		上流	下流	
ねり餌	ニッポンホソカ	ヒラマキガイの仲間	設置せず	アメリカザリガニ
		エビの仲間		フタバカゲロウの仲間
ニボシ	アメリカザリガニ	アメリカザリガニ	アメリカザリガニ	アメリカザリガニ
		サカマキガイ		フタバカゲロウの仲間
		ヒラマキガイの仲間		エビの仲間
2種 (ねり餌 +ニボシ)	アメリカザリガニ	捕獲できず	アメリカザリガニ	アメリカザリガニ
	ニッポンホソカ		エビの仲間	サカマキガイ
			サカマキガイ	
			エビの仲間	

(表Ⅲ-1) セルビンによる採取結果

2) 手網による採取結果

表Ⅲ-2のとおり。3地点で共通して捕獲された種は、サカマキガイ、ウスバキトンボ(ヤゴ)、アメンボまたはヒメアメンボである。

(表Ⅲ-2) 手網による採取結果

調査地点 捕獲種数	A地点	B地点		C地点
		上流	下流	
1	サカマキガイ	サカマキガイ	サカマキガイ	アメリカザリガニ
2	ミズムシ	ウスバキトンボ(ヤゴ)	ウスバキトンボ(ヤゴ)	サカマキガイ
3	ニッポンホソカ	フタバカゲロウの仲間	フタバカゲロウの仲間	シオカラトンボ(ヤゴ)
4	セスジユスリカ属の仲間	アメンボかヒメアメンボ	ヒラマキガイの仲間	ウスバキトンボ(ヤゴ)
5	ヒラマキガイの仲間		アメンボかヒメアメンボ	フタバカゲロウの仲間
6	ウスバキトンボ(ヤゴ)			ヒラマキガイ
7	トビゲラの仲間			エビの仲間
8	カワゲラの仲間※1			金魚
9	アメンボかヒメアメンボ			シュレーゲルアオガエル※2
10				アメンボかヒメアメンボ

※1オナシカワゲラ科の可能性あり

※2陸上での捕獲

3) 出現種

セルビンによる採取と手網による採取により捕獲された生物の観察の結果、15種の生物が確認された(表Ⅲ-3)。

4) その他

今回の調査では、採取した生物はそのまま、できるだけ河道の採取した箇所に戻した。

1	アメリカザリガニ
2	サカマキガイ
3	ニッポンホソカ
4	セスジユスリカ属の仲間
5	ミズムシ
6	ウスバキトンボ(ヤゴ)
7	シオカラトンボ(ヤゴ)
8	ヒラマキガイの仲間
9	エビの仲間
10	オナシカワゲラ科の仲間
11	トビゲラの仲間
12	フタバカゲロウの仲間
13	シュレーゲルアオガエル
14	金魚
15	アメンボかヒメアメンボ

(表Ⅲ-3) 確認された種一覧

5. まとめと検討

- (1) 親が飛来して卵を産んだ（例えばトンボのヤゴ等）か、他の何者かに付着して運ばれて来たもの等以外の、アメリカザリガニ、エビ類、金魚などは、人為的に持ち込まれたと推定される。
- (2) 金魚などは自然保護の立場から考えて、それほど実害はないかもしれないが、アメリカザリガニや鯉などは、その生態から考えて、問題だと思われる。アメリカザリガニは、ほとんどのセルビンに入っており、近くの川や、池等でのおびただしい繁殖の状況を考えると何か対策を検討すべきかも知れない。
- (3) 発見された貝の中で、サカマキガイは、モノアライガイほどではないにしても、ヘイケボタルが食べる貝とされている。
- (4) 今後とも同じ時期に、以下の3点から調査が継続されれば、面白いと思われる。1点目は生息す生物についての継続的なデータの収集として実施する必要性。2点目は夏休み期間中であり、はっけんのもりの立地が住宅内であるため、周辺に居住する小・中学生の参加による実施が可能なこと。3点目は育てる会、財団との共催による双方の長所を活かした歴史系、自然系の両方の視点による調査の実施である。
将来的には、実際に下宅部遺跡から出土した縄文時代のセルビンにあたる竹などで編まれた「ウケ」を作成し、実験をかねて調査に利用するなど、他の公園などでは実施できない、遺跡公園ならではの特色ある調査を、子供たちとともに楽しみながら実施したい。

